

寒いのはいや
熱が欲しい
暑いのはいや
熱が欲しい
ふつふつだくだくバリバリキトキト
汗はいや
熱が欲しい
欲しい

熱はここにあるはずそこにもあるはずちゅぽり
ちゅぽりここにあるはずいつもそこにあるはず
あるところをこいつらとはわかちあえないところをこいつらにきこっているはずの
ところのものを具体的にまとめてみる

ちゅぽり
熱が欲しい
あまりにたくさん熱であの寒さをどうにかしないと
どうにかしないと寒すぎる

寒いのはいや
どうにかするにはどうしたらいいか

ちゅぽり
寒くなくするための熱が必要なんといっても熱が必要
必要だったら必要なんだからなんといっても必要なんだから

熱を手に入れるんだここは熱があるはずだから
手に入れるんだ

ほっか」

あそこを出る
少し寒いがすぐあたたかくなるだろう
あそこは寒かったが熱が生まれるはずだ

空が赤くそまるころ

前から赤い車がくる

前から熱をもった人たちがくる

そつた、その顔がみたかった

もつしるのあそこにはない

この、ギラギラした顔にあいたかった

彼らは熱をもっている

彼らと比べれば寒くない

うしろにほとほとする熱

せなかに感じる熱

人々とわかちあえる熱

うれしいうれしい

うれしい

熱はここに

熱はみんなのものだ

もつあそこにはいらぬ

もつあそこに行くこともない

違う世界で会いたい人にもつ会えた

そつた、つかまえてくれ

熱につかされたその顔で

おいつめてさがしてつかまえてくれ

つかまえたほうがいいと思っよ

本当の熱はここに

いや、本当の熱はここからはじまったのだから

いいだろっ

ちゅぽり

空は赤い

詩集 第二回東京大会 川村龍俊

目次

- 見開頁第一・・・一回戦用
- 見開頁第二・・・二回戦用
- 見開頁第三・・・準決勝戦用
- 見開頁第四・・・決勝戦用
- 裏頁・・・・・・予選用

注記：この五編の詩は、第二回詩のボクシング東京大会に出場するにあたって執筆したものである。よって、持ち時間三分で朗読することを前提にしている。予選用は、二〇〇一年十一月十五日の予選会当日に、持ち時間を使って横書きノートに書き付けた。一回戦用、決勝戦用の四編は、二〇〇三年四月十九日の本大会当日朝にパソコンで作成した。

以下は、予選通過後、日本朗読ボクシング協会の求めに従って執筆した、予選感想と大会への抱負。大会までの間、詩のボクシング公式ホームページ上に顔写真入りで掲載された。

東京大会予選感想
二〇〇一年十一月に広島の可部線貸し切り車両で行われたジョン・ケージのミュージカスに出演しに行ったら知り合いになっ
た同イベント参加者の寺内大輔君が二〇〇二年第二回詩のボクシング全国大会に出演することになった旨連絡をくれたので前売り券を買って家内と
イノボルに見物にでかけて倉地久美夫氏の登場時に大笑いしてしまったのをNHKに思い切りアップで全国放映されてしまい多くの友人知人た
ちからテレビに出ていたよと連絡が入ってきて川村さんは見てただけなんですか予選で落ちたんですかと聞かれてなんとなく出てみるかという気にな
って詩のボクシング公式ホームページを見たら東京予選会の募集が始まることわかったのでエントリーしておいたものの仕事の都合で行けるか
どうか微妙だったものの前日の酒の場で調子に乗って明日予選に出ると宣言してしまっただのもかく出かきました。

東京大会への抱負
予選会当日まで仕事が忙しくて原稿の用意ができなかったので九時集合で楠氏の説明が九時半に終わってから会場の日本教育会館
九階ロビーで簡単な練習しながら会社のノートに詩を書いて回らつぷつ時計見ながら添削して会場に十五分に保ったら私の前の人がちよとと
終わってたところだったので前の人のを聞いて自分のをやって人混みが辛かったので発表の四時まで山の上ホテルの本館ロビーでシャーロック・ホム
ズ全集第三巻を読んでいたで他の人の発表は一切聞いていませんので四月の東京大会まで作戦を立てるもないので十二月三十日に楠氏から電話
をいただいて五つは詩を準備しておいてくださいと言われたものの書けるかどうかわかりませんが抱負なんて言える立場じゃありませんし当日
の仕事が入ったら棄権の可能性もあるし予選を通過した以上はそういう星のもとに生まれきたのかもしれない。

詩集『第二回東
京大会』著者

川村龍俊 発行

〇八年四月二日

印刷 限定一部

坂の途中にある家に住んでいたときのこと
家の向かいの空き地において
家を見ていた
坂の上から
三菱のコルトセダンが走ってきた
ちようど目の前で
車のドアが開いたと思ったら
車は大きくジャンプした
目の前一メートルのことだ
驚いたなんてもんじやない
車がほろりをまきあげ
無事着地して
スピードも落とさず
ドアが開まっていくのを見ながら
自分が考えていることは
すべて
大人にはわかってしまうのじやないかと
とつぜん思いついた
そのときの大人は
先生のことか
両親のことか
両親のことか
となりやちかくの人のことか
とにかく学生じやなくて
大人のことだ
そう思い始めたら
自分が何かを考えることは
そのまま思い切り
ばれているに違いないと思うようになり
それならば
相手がわかるより前に
すべてしゃべってしまえばいいのだと
幼いながらも論理的に結論を導き出した
それはそれはよくしゃべったものだ
今は大人になった自分は
思い返すことしきり
そんな自分に腹が立つ
今の自分はといえは
いくらしゃべったところで
こちらの真意など
まったく通じないことを
心から
信じているからだ
そのかわりといっちゃなんだが
最近
自分の見ているものが
そのまま
他の人にも
同じように見えているのだろうか
心配しようがない
この花は赤い
そういつせりふが
ひとりごとで終わるような気がして
しょうがない
赤いね
そういつせりふが帰ってきてても
合わせてくれたんだ
なんて優しいんだ君は
そんな風に思ってしまう自分が情けない
本当に自分が見ているものは
同じように君にも見えるのだろうか
物理的に目のレンズに映る
その像そのものは
いる角度によってすでに違う形であるとか
同じものを見ている
という意識なしに
焦点を合わせることなどあり得ないとか
そういうことはわかっている
この花が赤いと
私が言ったことを
本当は大人の君は
私と言う前からわかっている
だからうん赤いねと言ってくれたんだとしたら
その昔
自分が思っていたことが
正しかったんだと
今の私に言うことができる
赤い花
赤い花
赤い花が赤いと
君が見えるのだったら
自分にもそう見えているのだろうか
願わくば
赤い花が
自分が見ないときでも
君が見ないときでも
赤いことを
かくいう自分は
人の見ているものを見て
人と同じように見えていることを
疑ったことはない
いやいや
人が見ているものを
その人より
もつとよく見ているつもりになることさえある
天狗の鼻も赤いそうだ
まだ天狗に会ったことはないが
天狗は人の心を読むという
自分が天狗になっても
君は私が考えていることを
実は知っているのかも
ま、どちらでもいいけどね。

誰かの書いたものをよむより
誰かの書いたものについて読むことの方が
好きになっていっているなんてことはないか
それは読む体力が
衰えていることの兆しなのだ
本を買って読むのではなく
本を買って積むことが
いやもつと正確に
本を買って積むのではなく
本を買ったことで
深い満足感をおぼえていることはないか
それは読む体力が
衰えていることの兆しなのだ
俺には金がないから文学をやる
君は金があるのだから音楽をやれ
そう言ってくれた
悪い先輩とは
もろろん今でも交流があるが
先輩の真意とは
図書館で受けられる恩恵は
ただで手に入るということだった
図書館に行くのは好きなのだ
図書館で本を選ぶのが苦手だ
図書館で本を選ぶと
図書館に悪い気がして
図書館で読まずに
借りてしまう
借りたらさつさと読めばいいのに
借りたことそのものに
深い満足感をおぼえていることはないか
それは読む体力が
衰えていることの兆しなのだ
そのくせ
電車に乗ると
広告を読まずには居られず
隣の人の新聞をのぞき込み
何か本は持っていないか
靴の底をあさり
ちよつと酔っぱらって
他人の目が気にならなくなれば
網棚に雑誌でも置いてないかと
探し始める
人呼んで
活字中毒者
うそばつかり
読むのが好きなんじやない
読んでいなくて気が済まない自分を
演出しているだけのことだ
だつて家にあれだけ本があり
延滞の葉書が来ても返さない本があり
読まずに積んである本の上下をときどき直しているくせに
なんで家では読まないか
集めるのが好きなのか
分類するのが好きなのか
そういつせりふが解読してくれる
何かそういう意見を求めているのか
そういう意見をいただいたって
自分の糧にはなりやしな
本を自分の力で読む
その体力がないから
自分が受け止められない
重さを察知して
避けて歩いているだけのことだ
本当は読みたいのに
解説書だの
記事だの
広告だの
そういう
軽い
世界
観
に逃げを打つのは
本当の読書によって
人生を変えられることから
逃げてうとしていただけだ
知っていないはずだ
本当に本を読んだら
自分の生き方が読む前とは変わってしまうことを
もしそうでないのなら
そんな読書は読書とは呼べぬ
知っている
変わってしまう
守るためには
変わってはならない
だから
読まないで
読んだことにするために
解説書を読み
買つても積んで
周辺をぐるぐる回るのだ
いいから読めばいいじやない
変わつたつていいじやない
売るには惜しい本の山
家で部屋で責め立てる
たとえ一日一冊読んで
死ぬまでに読み終えるとはできない
物量
読め
読め

雨が咲く
暖かい雨
このにおいは雨のにおい
きょうくとうでも
きんちくせいでも
ましてやばらでもきくでもない
濡れていこう
ぬれをばちながら
考えよう
あしたの仕事
今日の仕事
かぜはひかない
ひくものか
雨が咲く
暖かい雨
風はない
風の音が聞こえる気がするだけで
風の音は
風が吹いてる音じやなく
風が何かにあたりたり
くくり抜けたりにあるときに
たまたま出ることがあるだけの
エオリアンハープ
雨が咲く
暖かい雨
晴れていても
地球のどこかで雨は必ず降っている
地球の視野に立つことはできないが
アマダスの画像を見ることはできる
想像力を答えに出す
テクノロジーの技の冴え
で
だから
想像力はどうした
雨が咲く
暖かい雨
出張先の
ホテルのバーで
外の景色をみながら
家にいる
家内と坊やをふと思つ
すると必ず
坊やから通信
坊やの耳はアンテナだから
ぼくとままのかわりに
すきにはれた
きよは
やけいをみながら
ぶつしをみながら
のんでくれたらうか
ぼくとままのかわりに
あしたも
まどのそとにひろがる
しんりよくを
たつぷりと
すいこんできてくれるだろうか
あーい
今日は雨だつてば
いや東京は晴れているんだらう
雨が咲く
暖かい雨
相合い傘で
帰れないつて
あんまり嬉しくない
雨が咲く
暖かい雨
運動会は
延期するつて
あんまり嬉しくない
ない
ない
雨があがつたよ
水たまりが咲く
正確には
水たまりに
風景が咲く
のぞき込むと
自分が咲く
水たまりの数を数え
数えているその時間を計り
今日の仕事
明日の仕事
昨日の仕事
考える
暖かい日差し
迫る初夏
地獄の季節
四月は残酷な月だ
そんな詩があつたつて
確か西脇じやなかつたつて
春は過ぎ
初夏が迫る
初夏を倒せ
あんまり嬉しく
ない
ない
雲間から
太陽が覗く
八〇パーセントの雲がある空は
実は晴れと呼ぶそうだ
気象庁たら
なんておちゃめ
自分の影をじつと見つめ
ばつと空を見る
暖かい雨は
西脇の女神が
南に連れていってしまった
柔らかな雲が
目に映る
雲をじつと見つめ
消えろと念じると
本当に消えると教えてくれたのは
家内だつたか坊やだつたか
家内は去年
そうやって本当に雲を消した
今年
私の仕事は
雲を消すことだ
もう消すのに成功したから
私は初夏を退治した
と一口に初夏は似合わない
だつて難かしいじやない
ヒールは初夏を潰滅して
夏を呼ぶ
南半球では
冬になるそうだが
だつてしょうがないじやない
地球は丸いんだから
アマダスの祭られる神殿で
雨は柔らかく舌を濡らすだらう
西の脇に
きつと水たまりがあつて
順に三つまで数える
男がいるだらう
暖かい雨
暖かい雨

切ないと感じた
それが
切ないということばで表せると
いつたい
いつ気がついたのか
気がつかなくても
いつの間にか使っていた
いや
切ないと感じたときに
いぢいぢそれを
切ないなあ
ことばにしていたわけじやない
ねこということばと
なことばであるというのはたやすい
切ない気持ち
切ないと言いつつ
どうして可能なのか
そんなことを考えて
切ない気持ち
客体化しなくては
やつてられない
この切なさ
好きなのと
好きでいることは
違ふのか
好きとは瞬間の思いでしかないのか
それは好きになるということではないのか
好きでいることを
信じ続けるために
好きと口にするのか
好きと口にするのか
好きと手紙に書くのか
いつか変わってしまうことを
知っているのか
好きでいること
好きでい続けることの間には
深い谷があり急流が流れていて
毎年の人が遭難するくらいの難所が
横たわつて
仕事を続けることはできる
ひよつとしたら切ないまま生きていくことだつて
けれど
好きでい続けることは
できたときにしか言えない
自分で自分の心臓の鼓動の早さを変えられないように
自分が好きでい続けることもできはしない
だから
好きだと思つた瞬間は
存在の証明だ
私は生きていると本当に実感したいのなら
好きだと思つた瞬間を
味わいつくすしかないのじやないか
最近あんまり死にたくないとお嘆きのあなたは
眠りたいと思つただけだと言いつつ眠るが
永遠に眠るのはすこく気持ちのいいことかもよ
一回起きてからまた眠るのは
それは本当に天国にいるようなことかもよ
生きていることが幸せならば
どのくらい好きなのがそれが
この世に満ちあふれているか
きつと君は
好きになつたんだね
二十一世紀の不幸
それは知らないことを誇れないことだ
われわれは
先人の作つた
何かを好きになる
あるいは
それを紹介してくれた人や何かのおかげで
それに巡り会う
それらを知らずに
何かを作り出したと
人にふれて回るのは
ばかぢやない
われわれは
好きになるものを求めている
われわれは
好きになるものがこの世のどこかにあると信じている
好きになつたものは
別の好きになつたものを呼び込み
こつて世の中には
たくさんの好きになるだらう何が
満ちあふれていることがわかる
貪欲たれ君よ
好きになれるものは死ぬほどあるぞ
君の作つた何かを
もし誰かに気に入ってもらいたいなんて
そんなことを考えているのだつたら
たとえそれが文章ならば
岩波文庫百冊読んでから
もう一度書き直せ
偉大なり先人の残したものは
偉大なりそれをそれとして好きになれるわれわれは
地球人よく聞け
死ぬのは割とつまらないらしいぜ